

秋の五箇山和紙祭り体験記

岡 哲文

二〇一三年一〇月五日〜六日。五箇山和紙の里にて開催。

昨年九月下旬に麦屋祭りを見に行くために五箇山を訪問した時、地元の人のお話が耳に入った。「来月上旬には和紙祭りが始まるから……」。

五箇山で和紙の祭りがあることは知っていた。ならば、来年は和紙祭りを見に行くこと決定とばかりに、その場で来年の予定を決めてしまった。

因みに和紙祭りの会場になる「五箇山和紙の里」は、上梨や菅沼といった五箇山の観光地から離れており、しかも唯一の路線バスの加越能バスが通っていない。レンタカーが利用できないなら、加越能交通バス下梨から、南砺市がオンラインで運行している市営バスに乗っていくしか方法がない。勿論、便数がそんなにあるわけではないから、私も五箇山に何度も訪問している割には、一回しか行ったことがないのである。当日は祭りの参加者向けに、南砺市営バスが一日に数本のシャトルバスを走らせているので、両日、往復それに乗ることにした。和紙祭りは今年で二三回目をむかえる。

猛暑の夏を通り越し、もう涼しい季節だろうと思いつき、長袖を沢山持って行ったが、一〇月なのに猛暑みたいな気候で、一枚しか持ってこなかった半袖ばかり着ていた。会場のギャラリーや舞台上の人たちもまた半袖やノースリーブの女性も目に付いた。

五箇山和紙は塩硝（五箇山では煙硝に塩の字をあてるため、この稿でもあえて塩の字を使用することにする）、養蚕と並んで、昔から有名な主要産業の一つであった。五箇山は平家落人の里として有名であり、五箇山和紙は都から伝えられた文化の一つであった。かつては冬仕事として、各家庭で行われており、江戸時代には半紙判が作られ、仏閣、障子などに使われた。また加賀二代藩主・前田利長公に中折紙が贈られたという記録があり、以来、五箇山和紙は加賀藩の手厚い保護を受けて発展し、良質な和紙の産地として現代に伝えられている。今の作り方になったのは明治時代になってからで、戦後、村出身の有志によって組合が作られた。京都の桂離宮の解体修理の際、特別に指名されたことから、その質の高さがうかがえる。五箇山和紙は、八尾和紙、蛭谷和紙と共に「越中和紙」の名で国の伝統的工芸品に指定されている。

まず一〇月五日土曜日、第一日目。

会場となる五箇山和紙の里は、道の駅たいらに併設されており、和紙体験館、和紙工芸館、さらに少し歩いた所にたいら郷土資料館がある。和紙体験館は合掌造り民家で、一階で和紙漉き体験コーナー、二階ではちぎり絵の展示を行っている。ちぎり絵展示は、前述したたいら郷土資料館の二階でも開催されており、期間中は郷土資料館の入館料は無料になる。出展作品は全部で一七〇品。道の駅たいらでは展示・販売コーナーがあり、道の駅たいらでは情報コーナーがある。それに沿ってトイレや土産物店、食事処などが連なっている。

当日、和紙の里には「五箇山和紙の里」というオレンジの幟と、「一七回ちぎり絵展」という紫の幟が翻っており、会場内にテントが建てられ、ひょうたん作りやちぎり絵体験、またはジュース、フランクフルト、焼き鳥などといった軽食を販売する所もあった。



合掌造りの和紙体験館の外観。大賞を取った作品「ちよっと楽しいよ」と、私が気に入った作品、「あれなーに」。(いずれもちぎり絵です。)

ちぎり絵の作品はどれもすごく精巧で、近くで見ないと水彩画か油絵と見間違えてもおかしくない作品が多い。和紙がつむぎだす芸術作品である。作者の根気と芸術性の高さをうかがい知ることができる。

会場の舞台には上に「一人、技、温もり」という青文字が、そして「五箇山和紙祭り」と真ん中に茶色の文字で書いてあり、右上に「主催 五箇山和紙祭り実行委員会」と書いてある。舞台背景は相倉集落の絵で、五箇山の民謡が流れている。

最初に、越中五箇山こきりこ唄保存会によるこきりこの披露が行われる。ナレーター的女性からこきりこ唄の時の楽器、鉦がねや擦りざさら、棒ざさらなどの鳴らし方の説明を受けた。こきりこ唄の由来なども説明がなされた。その後は、舞台上でこきりこ節が踊られた。まずは女性のシデ踊りが披露された。青い着物に鉢巻のようなかざらひもをして、両端に和紙で作ったシデがついた

こきりこ竹を持ちながら踊る。その後はあの勇壮な男性のオレンジの指貫と直衣、綾蘭笠にささらを持った踊りが続けて踊られた。

こきりこの披露が終わったら、続いて第一六回、全国和紙ちぎり絵展の表彰式が行われた。大賞、優秀賞から伝統技能賞、奨励賞、北日本新聞社賞など、細かい賞が沢山あり、それぞれの受賞者が賞状を授与された。



女性のシデ踊り。ちぎり絵の受賞者と、南砺市市長を含めた受賞者の集合写真。

舞台上でまた民謡が披露された。「清流会」といって、地元平高校郷土芸能部OBによる麦屋節、お小夜、こきりこ節が踊られた。去年の麦屋祭りの紀行文でも書いたけれども、この平高校は唯一郷土芸能部が存在する高校として有名で、そのレベルは高く、東京でも公開されている。地元で伝わる芸能を若い世代に伝えていき、若い側もそれを自分が伝承していこうという気持ちで伝わる話である。

一五時三〇分を過ぎてから餅つき大会が行われる。しかし、件のシャトルバスは一五時四五分が最終なので、餅つきを見る時間はほとんどなく、予定通りシャトルバスに乗り込み、下梨まで走ってもらい、下梨からは宿の車に迎えに来てもらった。

一〇月六日日曜日、二日目。

この日も、前日と同じく快晴で暑く、半袖で過ごした。前日、会場近くの蕎麦屋でお昼を食べたら、夕食近くに空腹を覚え、宿の夕食を大食いしてしまったために、きちんとしたお昼ご飯を食べておこうと、下梨での待ち時間を利用して下梨で昼にした。お昼ご飯を食べた店の駐車場で麦屋節が公開されていた。これは毎週土日に下梨で行われる。シャトルバスに乗り込んで会場に向かったが、開始まで時間がかなりあったため、ちぎり絵展をもう一度ゆっくり見

てから、和紙の里で紙漉き体験を行った。はがき作りは三枚で五〇〇円。型は木組みでできているから、はがき内に入れる模様などは自分で選んで作る。スタンプがレクチャーしてくれるので簡単に作るができる。

一三時より開始される。最初に砺波地区社会人バンドネットワークコンサートによる演奏が行われる。砺波のさまざまな地区から集まったメンバーで、全員私服、中にはノースリーブの女性もいた。南砺市の「緑の歌」の演奏から始まり、子供用に「夢をかなえてドラえものの歌」、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」、NHKの朝の連続テレビドラマ「あまちゃん」のテーマ曲と続いた。あいにく私はどの曲も殆ど知らず、初めて聞く曲ばかりだった。続いて演歌メドレーが演奏され、「北国の春」、「北酒場」、「川の流れるように」へと演奏が続いた。私は演歌には疎いけど、さすがにこれらの曲は聞いたことがあった。それから東日本大震災復興キャンペーンのテーマ曲「花は咲く」も有名である。



自分で作った五箇山和紙のはがき。社会人バンドの演奏。下梨で披露された麦屋踊り。

続いて餅つきが行われた。昨日はシャトルバスの時間があったて、餅つきを見ることができなかったけれども、今日は見ることができて、勿論食べることも可であった。杵で餅をつきたい人たちが前に出てきて、司会者から色々質問を受けていた。その中に広島から来た男性もいた。老若男女、一列に並んできな粉まぶしの餅をもらう。

舞台上では、小谷（おたん）麦屋節保存会による民謡踊り披露が行われた。五箇山とは赤尾谷、上梨谷、下梨谷、小谷、利賀谷の五つの谷の総称で、その中の一つ、小谷の麦屋節である。保存会の方より、民謡の歌詞についての説明がなされた。小谷麦屋節以外にも、麦屋節、古代神、小代神、小谷麦屋本踊りと続いた。



小谷麦屋を踊る女性たち。次は女性の麦屋踊り。オープンしたばかりの喜茶 和「でれいどん」。

それが終わったら、舞台での催しは終了する。シャトルバスの発車時刻まで時間があつたから、切り絵の展示会と周辺施設をみて回った。また、私はもうずいぶん前に、一度この郷土資料館を見ただけだったので、もう一度ゆっくりみたいというのもあつたし、私自身が過去に遺跡発掘のアルバイトをしていたから、縄文時代の五箇山の歴史とかを知りたいと思ひ、ゆっくり見て回った。五箇山で発見された縄文式土器以外に、江戸時代に行われていた、塩硝や和紙の製造過程も詳しく展示されている。

こうして、シャトルバスに乗り込み、和紙祭り会場を後にして宿に戻った。場所が五箇山の中心からずれているから、余り人が来ないのかと思つたが、土日だったためか、近隣のみならず全国から沢山の人が訪れており、昨年の麦屋祭りとは違った楽しみ方ができる祭りであつた。

ついでながら、この先に「ゆる楽」という温泉施設がある。そこにも、件のシャトルバスでしか行くことができない。(宿の車で送迎してもらえるかもしれませんが)、シャトルバスは平日のみの運行だが、道の駅平に寄って、更にゆる楽にもよつてという設定ができないから、私はついつい温泉の方に行ってしまうのである。だから今回はゆっくり和紙の里の施設を楽しむことができた。

和紙祭り以外のことだが、五箇山の上梨地区、一際大きな合掌造りの「村上家」や同じ合掌造りの「五箇山総合案内所」、その他お土産物屋や宿、そば屋などが軒を連ねる中に、オープンしたばかりの喫茶店「喜茶 和」でれいどん」がある。「五箇山総合案内所」の隣、白い合掌造りの屋根のような建物がそれである。

メニューは栃餅のぜんざいや、五箇山豆腐の豆乳を使ったスイーツなどが味わえる。コーヒーとケーキを食べながら、オーナーの大瀬さんと語らいながらゆっくり時を過ごす。相倉で合掌造りを見て、上梨で村上家に立ち寄り、その足でこの店に立ち寄ってゆったり過ごすのもいいかもしれない。

追記。(五箇山、白川郷以外の合掌造り民家)。

私の手許に『明治村から江戸東京たても園まで全国三五館 たても野外国博物館探見 文、平岡祐 巻頭、藤森照信 JTB』という本がある。目下絶版で、アマゾンなどを経由してでしか入手できない。今回の旅行は五箇山に来る前に飛騨荘川から白川郷を経由した。その理由は荘川にある「荘川の里」のことを知ったからである。(詳しくはこの和紙祭りとは別個に独立して文章化します。)

荘川の里についての記述を読んでいた時に、偶々「富山市民俗民芸村」という施設の記述が目に入った。そこには五箇山以外の場所から移築した合掌造りが展示されていると書かれていたため、早速ネットで検索をかけてみた。(当本は初版が二〇〇〇年のため、掲載されている施設のホームページアドレス等は記されていない)。五箇山での和紙祭りが終わった翌日、一〇月八日に取材を申し込んだ。

五箇山で最後に宿泊した五箇山荘では、サービスとして城端駅までの送迎を行っている。今回はそれを利用したため、城端線、北陸本線への接続が思った以上に早く、お昼頃に富山市内についてしまった。然も天気予報によると、翌日九日は大雨になるでしょうとのこと、雨の中の取材では、私だけでなくて学芸員さんにも迷惑がかかるため、晴天のその日に急ぎよ無理言って日程調整をしていたのだ。案の定、その日も蒸し暑い日だった。

富山駅前のバスターミナルから富山地電バス呉羽老人センター行きのバスと、駅前c i cビル横(富山エクセルホテル東急前)から、富山ミュージアムバス(ぐるりん)に乗って行く二つのルートがあるが、路線バス、ミュージアムバス、どれもほぼ一時間に一本しかない、一番早い時間のぐるりんに乗車する。

富山民俗村がバスの車窓から見えてきた。山の中腹みたいな場所に、大きなかやぶきの合掌造り建物が民俗合掌館である。屋根の茅もきれいにふいており、壁も汚れていない。ここで料金を払い、学芸員の方から説明を受けた。



民俗合掌館の屋根の前に木が生えている。内部の箱階段は飛騨より、その他保存状態の良い民具。

富山市民芸合掌館の古民家、旧山岸家は、江戸時代末期に富山県富山市山田数納（すの 旧山田村）に建てられていたのを、一九六八年（昭和四三）に、この地へ移築した平入の合掌造りであり、豪雪や風雨に耐える巨大な柱や梁の用材は主にケヤキで、建築に八年を要した。旧山田村数納の地図が民家内に展示されていたが、五箇山の隣、南砺市の利賀（旧利賀村）に近く、おそらくその影響があるものと思われる。昨年の麦屋祭りの記事で紹介した、神奈川県川崎市の立日本民家園に旧利賀村から移築した旧野原家がある以外に、私は利賀の合掌造り古民家を見たことがない。また現在の利賀には合掌造りはない。昔は五箇山以外の近隣の村々では戦後しばらくまで、合掌造り家屋が存在していた。



旧山岸家内部の囲炉裏、部屋、掛け軸が立派な落ち着く和室。

そこから次の「富山市民俗資料館」へ移る。ここも大きなかやぶき民家で、私が訪問した時は「船頭の船箆笥」という企画イベントを行っており、入口の前に赤い旧型の円柱状のポストが目に入ってきた。旧谷浦家住宅で、昭和四九年に富山市山田中村（旧山田村）にあった農家住宅で、江戸時代後期に建築さ

れた。合掌造りでも屋根裏二階部に窓があるが、この民家も小さな窓を持っている。この窓は、この後に述べる荘川系の古民家でも同じものがあつた。五箇山や白川郷と同じく、この民でも屋根裏で養蚕や作業に使われていて、採光、通風の役割を担った。

一階は主に衣食住を中心とする生活用具や祭礼用具が展示されている。一つ一つに紙で名札みたいなのがついている。今まで都内や他県の古民家を見てきたが、このような紙を貼っている所もある、大体、地元の小学生の課外授業のためだ。特に私が目に付いたのが実物の籠で、時代劇では見たことがあつても実部を見たことがなかった。時代劇でよく見る籠は黒塗りだが、この籠は全く色を塗っていない。屋根裏の二階にも民具がたくさん展示してあるが、それらにも名札がついている。また更にガラス製で球形の「蠅取器」が目についた。説明札によると、「中に食塩か米のとぎ汁を入れ、容器の下に紙を敷いて砂糖を置くと、蠅が下から入ってきて、中で落ちる」仕組みになっている。昔の人の生活の知恵に驚いた。展示してある民具などは一三〇〇点に及ぶ。





富山市民俗資料館の外観。内部に展示してある籠、囲炉裏周辺の民具等。二階屋根裏の生活民具や作業具。前述したガラス製の「蠅取器」。

こうして富山民俗民芸村の合掌造り取材は終了し、行きにも乗ったミュージアムバスぐるりんに乗車して富山駅へ戻った。

※五箇山滞在中に、既存の高岡駅から城端駅、相倉、菅沼經由白川郷荻町神社行き加越能バスに更に「世界遺産バス」というのが加わったことを知った。通常は一日四本しか走っていないのだが、土日のみ、既存路線を含めるとほぼ一時間おきにバスが走っていることになる。だから土日の移動はすごく便利になったが、私が訪問した時はまだ開通して間がない頃だったため、観光協会でも詳細を把握していなくて、更に運賃も安くなっているものの、ドライバーもそれを把握していなくて、私が指摘しなければ、高額の運賃を取られる所だった。この路線は二〇一五年の北陸新幹線開業に合わせて実験的に走行させている。

基本データ。

道の駅たいら・五箇山和紙の里

〒九三九・一九〇五 富山県南砺市東中江二一五

電話番号 〇七六三・六六・二二二三・二四〇三

FAX 〇七六三・六六・二二五〇

<http://gokayama-washinosato.com/>

南砺市営バスについて

富山県南砺市HPトップ↓お知らせ↓南砺市営バス『なんバス』時刻表上に路線図、時刻表などがPDF化されております。

世界遺産バスについて。加越能バス株式会社、砺波営業所及び高岡営業所。

砺波営業所 〇七六三・三二・三二五二
高岡営業所 〇七六六・二一・〇七四八

喜茶 和 でれこでん

電話番号 FAX 〇七六三・六六・二三一二
千九三九・一九一四 富山県南砺市上梨七四一

富山市民俗民芸村

問い合わせ先 富山市民俗民芸村管理センター

千九三〇・〇八八一 富山県富山市安養坊二一八一番地の一

電話番号 〇七六・四三三・八二七〇

FAX 〇七六・四三三・八三七〇

<http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/minzokumingei/>

観覧料 一館のみ 大人(高校生以上) 百円 小人(小・中学生) 五十円。

一館のみ団体(二十人以上) 大人八十円 小人四十円。

全館(個人) 大人五百円 小人二百五十円 団体大人四百円 小人二百円。

交通案内 富山駅より車で約一〇分。

バスでは富山地電バス新桜谷行安養坊下車徒歩五分。呉羽老人センター行富山民俗民芸村下車すぐ。

富山ミュージアムバスぐるりん(富山駅前C i Cビル横から民俗民芸村で下車。

<http://www.city.toyama.toyama.jp/kikakukanribu/bunkakokusaika/myujiamubasu.html> はこちらに詳細が載っております。

開館時間 午前九時〜午後五時(入館は四時三〇分まで)

休館日 年末年始(十二月二十八日〜一月四日まで)他に臨時の休館があります。

『明治村から江戸東京建物園まで全国三五館 たてもの野外博物館探見』

(文 広岡祐 巻頭写真 藤森照信 JTB 二〇〇〇年一〇月初版 絶版。)